

槐

かい

岡井省二創刊

平成16年4月号

平成十六年四月二日発行 第十四巻第四号 通巻第五四号（毎月二回）廿九行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



バーチャル・リアリティ

高橋将夫

鬼やらひ早くから鬼来てゐたり
門前に戻つてをりし雪だるま
摘んでをり心の中の芹なづな
まどろみの底の底なる海鼠かな

声 冴ゆる極楽橋のたもとかな
つめたさの綿にくるまれ黒真珠
大枯野めぐる回転木馬かな
融合も和合も冬の銀河かな
冬霧の中のバーチャル・リアリティ
風車人の来るたび回りたる
人間の来てゐる獺の祭かな

寒 木 瓜

吉 田 順 子

冬 桜 咲 く 光 陰 の 水 明 り
遠 山 に 光 る も の あ り 冬 の 蝶
う す う す と 人 の 影 あ る 冬 の 霧
日 ざ し ご と 両 手 に 受 け し 冬 堇
日 の ぬ く み 枯 野 に あ り て 子 等 の 声
雪 降 つ て 音 の 遠 の く 一 日 か な
青 空 を 揺 ら す 冬 木 の 桜 か な
独 り 居 に ひ と り の 音 や 七 日 粥
今 汝 の 踏 み ぬ る 草 が ほ と け の 座
雲 間 より 日 矢 さ し て 来 し 福 寿 草

特別作品

寒梅の蕾ふれあふ音すなり
切株のころがつてをり寒雀
寒卵風音かはる夜となりぬ
寒木瓜のもつれし垣の月日かな
天日のほかは動かず牡丹の芽
まんさくや遠嶺に雪の残りをり
土くれに光あつめて雪割草
夕暮に何の水輪や猫柳
大いなる湖の光りて野焼かな
黄梅に明るき雨の降りにけり

槐安集

市場基巳

池みづの冬にすら澄むことなしと
身はすでに流れにまかせ鳩
よく晴れて鮎の錆よぶ寒さとも
餌に飢えし犬が霜嗅ぎぬしが掘る
ゆく年の鳩ひろびろと沖に浮く

水野恒彦

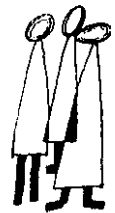
桜いま冬木となりて蒼茫と
山なみを眩しと見たる初曆
鶏乳む朱色の月の昇りたる
能始ここにも山気深めをり
晩学やはるかに鮫の白波か

石脇みはる

うやむやに入りこんで来し鯨かな
冬日さす大池の上のすり舞ふ
元日の月を拝して眠りけり
初祝西の峰茜千年杉の西の峰
春暁の寂光院に来てをりぬ

竹内悦子

重箱の中の草石蚕や赤面す
薄氷の奥を覗いてをりにけり
亀の甲白く光るや壬生慈姑
牡丹雪赤い帽子の人とゐる
宙・空・そら・麗らうら蒼き蒙古斑



木下野生

枝ぶりのよき木が二本初明り
元日の大河が流れぬたりけり
枯菊を焚きそれらしき煙なり
虎落笛一番星がひとつだけ
梟や俎板に水ぎぶざぶと

中島陽華

夕オル所望す荒らし男をの午祭
鶯の声崖のレストラン
八つ目わらんず腰にあり寒施行
ねこ舌の前のだご汁寒の入
田井の芹摘み慈恩寺の佛かな

延広禎一

大年や顔いつばいに蒸タオル
天元に碁石置きたりおらが春
産土神を背ラにしたり宇宙独楽
焼山や大鼓おほかは打たれをりにける
袖濡るるは雪か泪か木偶の恋

栗栖恵通子

歳晩の土星にドーナツはまらんか
大旦たかたか指に蝶とまる
天網を星の出で来る寒九かな
冬銀河方曼陀羅となりにけり
死者の椀割つて二月の来たりける

加藤みき

枯れきつて葦のさやぎの更なりき
春の風耳のうしろをよく洗ふ
くさぐさの魂の上_三実南天
日だまりの枯葉の動く音なりき
海われの恵方としたりけり

大島翠木

こきこきと初日を歩く矮鶏の首
初夢や烏賊のカラスと言へるもの
鏡掛落とし寒九の昼の月
円柱や昼の寒満月なりき
白日や即身仏に枯れ八方

岡井省二全句集

句集『明野』から『大日』までの
全句集十一巻を収録。
解題、年譜付き、A五版、五〇〇頁。

定価三、八〇〇円（消費税込）

角川書店発行（平成十五年十一月）

申込先 千五三六一〇〇〇八
大阪市城東区関目二丁目二二一
高橋邦夫
〇六一六九三四一五四九〇

北嶋美都里句集

「西の峰」 本阿弥書店発行

定価二、八〇〇円（消費税別）

申込先 千五七〇一〇〇九八
守口市新橋寺町四一八
北嶋美都里 宛



槐市集

大山 里

冬天や人より大き絵馬の蛇
水鳥の白と云う色青みけり
墳山のぐるり吹かるる寒の水
寒の雨鯉のまぶたを白くする
冬草に荒地てふものなかりけり

片岡 静子

鶏小屋の屋根の明るき二月かな
飛行機の曳いてゆきけり春の幕
干し竿の下に丸まる露のとう
父のこと想い出して母の春
青年はシェフの姿よ春立ちぬ

加藤 富美子

雪が来る仮死となりたるかたつむり
冬の湖老人船を焼いてをり
大寺の日射し一ぱい手毬唄
法螺貝の音ときどきにどんどの火
大き木に大き雲あり一の午

金澤 明子

初場所と病夫とをテレビイヤホーン
駅伝の画面に郷の京時雨
太陽柱西山しばし残り福
差し交はしところ虹あり出初水
寒の月次男夫の枕辺に



槐集

高橋将夫選

火の上の榮螺の角と螺旋かな
枚方

雨村 敏子

霊水の氷柱にふれて手を洗ふ
枚方

谷村 幸子

楝くやその先にあるお竈くどさん

同行二人一月の土佐にあり
紅梅の脇で唱へし般若經

肩車の子に持たせたる破魔矢かな

初春の淡海なりけり黄八丈

牡丹雪氷の上に乗りにける

大寒の百合根はがしてをりにけり

大寒や葉書一枚出しに出る

雪野原風の重たくなりけり

道化師の胸の奥なる厚氷

岡崎 近藤 喜子

東を向きしままなる鶴の首
梟の前を何度も通りけり
人日のひとはらの辛子明太子
冬眠の蛙の上を歩きけり
韃靼の風を封じて羽根をつく
福岡 楠 翁

笹鳴きや日差しのロココ調のとき

雪野原風の重たくなりけり

寒雷やはね上がりたるダリの髭

東を向きしままなる鶴の首

雪兎オーローラの下かけて来よ

人日のひとはらの辛子明太子

讚美歌の染みとほりたる寒の水

冬眠の蛙の上を歩きけり

風花の日のまはり来る西の峰

中野 京子

韃靼の風を封じて羽根をつく
福岡 楠 翁

炭を焼く煙壺中の天に入り

猩々と夢を転がす二日かな

どこまでが白き顔なる鯡かな

遣ヤリ手テ婆バと女メ衞ゲンのわれと初写真

紫貝の息吐く空や寒茜

天秤で量りし去年を海に捨つ

蜜柑むく地球が溶けるその日まで

一舟に雪を被ぎて川漁師

銀河往来 高橋将夫

|| 百花繚乱 ||

▽百花繚乱。今年の「槐」の俳句のことである。

俳句は今日まで長い歴史を積み重ねてきた。そして、今まさにその成果が絢爛と咲き誇っていて不思議はない時期にあると思う。ところがそうはなっていない。今日の大勢は、ごく限られた方向に向かってしか流れていないように見える。

結社にはそれぞれ主義主張がある。それでこそ結社の存在意義がある。しかし、それは同時に結社の限界でもある。超結社が言われる所以である。その意味では、「槐」は超結社である。それほど「槐」の容量は大きいということである。それほどのキャパシティが有るということである。

▽『対岸(十二月号)』(今瀬剛一主宰)、「結社誌を訪ねて(十七)」の福井隆子氏の鑑賞文を紹介しておく。

|| はたがみ海馬しづまりあたりける 高橋 将夫

はつとするようなユニークな一句である。「海馬」はセイウチやトドを指して言うこともあるが、この場合、人間の脳の組織の「海馬」に違いあるまい。

大きな稲妻が走り、雷鳴がとどろき渡った時、自分の脳の中の、感情や行動やさまざまな感覚をつかさどる海馬が一瞬しんと静まり返ったと氏は言う。へはたがみ〓の神たる所以であるうか。そしてその静まり返った自分の海馬を意識した人間の表情が、映画のスクリーンを見るように読者に見えてくるのが又面白い。このユニークさと新鮮さが魅力である。

||

火の上の榮螺の角と螺旋かな

雨村 敏子

榮螺の角と螺旋模様の幾何学的構成。自然の神秘、造化の不思議である。それを火の中に見る。火の中に崩れる牡丹に比肩。

讚美歌の染みとほりたる寒の水

近藤 喜子

まるで、讚美歌の透き通るような美しいハーモニーが寒の水に溶け込んでいくようだ。実に新鮮な感覚。

炭を焼く煙壺中の天に入り

中野 京子

壺中の天(一壺天)は後漢書のご故事に由来する別世界のこと。俗世を離れた世界へ俗世の煙が流れ込む。炭焼の煙が俳諧。

霊水の氷柱にふれて手を洗ふ

谷村 幸子

氷柱がこの句の眼目。刺すような冷たさと、寒さと、厳肅な雰囲気伝わってくる。

雪野原風の重たくなりけり

谷口佳世子

雲が低くたれこめる雪国。風までが重く感じられる。それだけに、冬晴れの日の空の青さはまた格別。

天秤で量りし去年を海に捨つ

楠 翁

あれこれ計りにかけてみたことも、過ぎてしまったからには、海に捨てるしかない。だが、捨てかねるものの中には…。

(以下略)